

日本聖公会 川越基督教会

資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

第 1 号

(2015年12月)

この夏から始めた教会資料の整理作業も多くの奉仕者のもと、順調に進められています。まず、種類ごとに分類された資料の目録を作成し、それに沿ってスキャン（保存複写）作業を行っています。時折、難題にぶつかります。分類の決め方、筆文字の読解き、年数の判別等々苦勞します。明治19年頃の草創期から戦争中の教会合同時期のものまで、貴重な資料が多数保存されています。

作業の様子、苦勞話し、新発見の文書？、資料を基にしたお話し等、この「資料委員会便り」で皆さまに随時お伝えしてまいります。

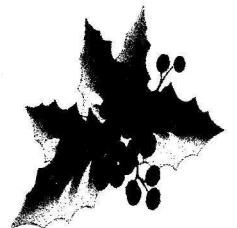
資料保管のノウハウを

学ぶため、9月に「教会アーカイブス入門」の勉強会を実施しました。いのちのことば社刊「教会アーカイブス入門」の著者、新井浩文氏（埼玉県文書館学芸主幹）を講師にお迎えし、15名の参加のもと開催されました。講師の先生も当教会のめづらしい資料には驚愕されておりました。

上記の書籍は教会図書に蔵書されています。

明治38年頃より川越教会には5名の女性宣教師が着任しこの地に住まれ、教会、幼稚園に奉職されました。そのお一人、米国人ミス・ヘーウッド師は、その当時の川越の様子を多くの文章に残されています。この度、資料保管委員の森信幸兄はこれらの文書類を翻訳し冊子にまとめられました。写真も多く載せられた貴重な資料集となりました。閲覧ご希望の方はお申出ください。

明治28年から2年間、田井正一司祭は渡米されました。その折りに在米アジア人のために「サンフランシスコ・クライスト・チャーチ」を設立されました。現存するこの教会の信徒、Kナガイ氏が先程、川越教会を訪問、主日礼拝に出席されました。主日の諸行事の後、ナガイ氏からお話しを聞く機会が持たれました。その時の講話の要旨を資料保管委員の玉木純子姉がまとめられました。ご一読ください。



〈長寿を祝う会とケイ・ナガイさんの来日〉

アメリカのサン・フランシスコよりケイ・ナガイ氏が10月4日に訪問された。その日は長寿の方をお祝いする会が催されるので、80代のナガイさんも参加することになった。閉会後は会館2階の図書室で、歴史資料保管委員会が中心となり、今回の来日の主旨についてのお話を伺った。まず、川越キリスト教会の歴史、特に田井正一司祭の働きについてのお話が山本元氏よりあった(参考資料は松村祐二委員長作成)。次にナガイさんがご自身の歩んだ道をクライスト・チャーチの歴史と合わせて語られ、終りに今後を見据えた要請をされた。その後田井家を見学。

・ケイ・ナガイさんのお話

サン・フランシスコ生まれの日系2世。所属するクライスト・チャーチは120年を経ており、自分は「教会で生まれたようなもの(存在)である」という。父親は「生糸の町」と呼ばれる所(桐生市)で育った人、母親は九州ではじめての日本聖公会の牧師の娘だった。米国は当時公民権運動が盛んで、父は米国で私立学校を作ろうと考え、新聞を出したりしていたという。

米国ではプロテスタント(長老教会)のスターチ博士などを中心に布教がなされていた。日系人の出稼ぎが多く、日本よりもサン・フランシスコへお金をまわして活動せよ、ということで田井師が送られ(注、明治28(1895)年～30年)、クライスト・チャーチを作ったのだった。

多くの教会が3階建てのアパートで寄宿舍をして、日系人を泊ませ(10セント)、英語を教えて礼拝に加わらせた。中には大学へ入れるくらいの頭の人もいたものだった。そういった布教活動をメソジストなどが10年くらい行っている間、聖公会だけがしていなかったので、米国のニコルス主教が日本のウィリアムス主教に言って田井師が派遣されたのである。

始め寄宿舍を単独ではできそうになかったので、日系福音会のグループと一緒にやったが、1～2年して大きくなったので聖公会だけのものを運営して拡大させていった。出稼ぎが増えて若い人は「写真で結婚して」(見合い、実物と違う、ということがよくあったようだが)、子供が生まれると米国籍ということでアメリカ人として育たざるを得ないという問題もあった。そういうわけで「^{にほんじんまち}日本人町」では若者のためにダンス・パーティーを開催した程活気にあふれていた。しかし、彼らの多くは教会へ足を運ばなかった。

戦争が始まると、日系人は「キャンプ」(強制収容所)へ「ぶち込まれ」、「ジャップ・ゴー・アウェイ」

とののしられた。キャンプに仮に入っていなかったとしても、物も売ってもらえないような状況だったので入っているのと同じだった。1945年に戦争が終わると、戦前に築き上げたもの(注、農地や建物などの財産)は全て失われていて、帰るに帰れないような有様だったが、教会が集会所を建てて落ち着いてきた。それは1964年まで続いた。

その頃、川越の教会はどうだったのか？横浜の教会では、日本基督教団から戻るのに大層な儀式を要したと聞くが…。(注、川越の人たちの話。川越の教会は昭和17(1942)年に松原剛司祭の元で「聖愛教会」として日本基督教団へ加入して一時消滅せざるを得なかった。3年後聖公会へ戻った)

1970年代になると教勢は伸びなくなってしまう。米国では誰もが自由に就職できたような時代で、日系の子供たちも学校へ通ってそのようになった。しかし、ここでもまた日系移民は頭も良く米国でなくても日本どやっていけるから(職をうばうな)と閉め出されるようなことがあって、教会も人がいなくなっていくのだった。

米国聖公会による東洋系の人々への「プログラム」は1967年より始まった。しかし、今ではロスもシアトルの教会も2~3人しかいないという状況になってしまった。日系の教会は誰れを相手にするのか。日系の教会は宣教に力を入れてこなかった。人種系の教会はフレンドリーゆえにそうになってしまう傾向がある。特殊な人たち、とかに乗ってもらうのか。そういった人たちだけの教会というのもアメリカにはあるけれど、「良いところを生かせ」と神は言っておられるのだが、日本語を話せる人がいないのをどうするのか。30年前からそういう話は出ていたものだ。なぜ信徒が布教せねばならないのだろうか。しかし、牧師だけが布教活動をしていても無理だろう、ということもある。どうか、ここ(川越)から教区へ言ってもらえないだろうか、日系教会へ日本語を話せる牧師を派遣して、と。田井氏のところから他にも教会はいくつか出来たが、今に残るたった一つの教会は、一番はじめに田井師が創ったこのクライスト・チャーチだった。サンフランシスコは日系移民の出入り口でもあるので、そういう土地柄であった、ということも大きな要因であろう。

仏教界は意外にも減っているとはいえず、またかなり人は多い。2~300人の人に加えて白人も多くいる。クライスト・チャーチは30人中礼拝に出席するのは5~10人、13人来れば多い方だ。昔は復活祭に100人くらい来た。今、日系の人は数人である。もし、日本から牧師が来たら、聖書研

究会とか、または宗教に関係のないコミュニティーの行事に参加してもらうなどして、宗教をすべり込ませてもらい、信徒を増やしてもらいたい、力を借りたい。(2015年10月4日)

・田井家へ訪問

夕方より、田井司祭が普通だったという道順で(松村氏の案内の元)教会から田井家へ。司祭が途中立寄ったというそば屋は今は田舎会館となっている(そば屋の面影を残す)。歩いて5分程で到着。柿や銀杏、キンモクセイなどの大きく繁ったお宅へおじゃまする。増改築されているということだが、今も丁寧に昔のものを残して住まわれている。縁側のある突き当たりが田井長老の部屋だったところ。六畳の天井の低いこじんまりとした和室。床の間の右に小さな格子入りの障子、上に富士を切り抜いた欄間、その上に長老の肖像画が掛けられている。ご主人の見守る中、満喜子さん(田井司祭曾孫さん)とナガイさんは画の下で握手をされた。

聞き書き・記録：玉木純子